全斗煥来日阻止

1.23 2.10 死刑確定判決、3.1半無期減刑

全学の学友諸君！　韓国軍事独裁政権は、昨日23日、法廷死刑確定判決→即日大統領特赦という茶番劇の形をとって、金大中氏に対する有罪無期懲役の攻撃をかけてきた。我々はこの暴挙を決して許さず、金大中氏ら民主人士の完全釈放まで闘い抜かなくてはならない。同時に侵略抑圧の尖兵として日・米帝の支援のもと、反革命軍事同盟強化に奔走せんとしている全斗煥の訪日を許さぬ闘いが求められているのである。

■体制危機を更なる抑圧で乗り切らんとする日帝、米帝、全斗煥■

昨年末、帝国主義は極めて露骨な形で「体制危機を人民に対する暴圧で解決する」方針を鮮明にしている。「強いアメリカの復活」を掲げた米帝レーガンの登場も、日帝鈴木の極反動政策も、こうしたものとして軌を一にしている。反共軍事拠点として、そして「日本経済の生命線」としての韓国を手中に確保するべく、日米帝は「分断、新植民地支配体制維持を如何なる手段を使ってでも保障する」全体制に全面的なテコ入れを行なっているのである。

■敵は何故金大中氏を殺そうとし、何故殺せなかったのか■

韓国経済は、現在未曾有の危機にあり、全産業マイナス成長が確実となっている。見せかけの高度経済成長のもと、労働者階級の犠牲下に日帝日本を太らせてきた矛盾が噴出しているのである。この危機は、労働者の決起から朴正熙射殺を経て広範な民主化闘争の奔流となって爆発し、過酷に武装蜂起でもって応えたあの光州蜂起に果たつあった。これに対して帝国主義者とその手先は新植民地支配維持のための唯一の選択として、民主化闘争の核心そのものの運動一中でも民主化闘争の核心と目されている金大中氏の抹殺を決意したのであり、執行人として全斗煥を選んだのである。

日米帝と全斗煥にとって、韓国民主化闘争にすさまじい役割を果たしている金大中氏に政治活動を許すことはもちろん、例え獄中であっても生かしておくことは極めて「危険」なことである。事実、韓国民衆の力量と我々自身の闘いを含めた全世界の死刑阻止闘争の1月期の高揚がなかったならば、あるいはこの1月期、敵の思惑どおり闘争を沈滞化せしめてしまっていたならば、敵はためらわず金大中氏を処刑していただろう。敵がそれをなし得なかったのは、とりもなおさず世界の人民の闘いの力によるのである。

■日米帝による全体制的テコ入れを粉砕し、金大中氏らの完全釈放を勝ち取ろう！■

しかし、日米帝と全斗煥は、金大中氏を無期刑に処すことによって彼の政治生命を絶ち、民主化闘争には引き続き徹底弾圧で臨む姿勢を明らかにした。死刑確定判決→無期減刑という筋書きは日米帝と全によって完全に仕組まれたものであることは明らかである。それは「レーガンの新政策」なる自画自賛、日帝による出稼ぎ従属強化の判決新決定等にも示されている。減刑で国際世論をなだめることによって一民主化圧殺の実をあげつつ一日米韓反革命同盟の強化を推進するための地ならしを図ったものが昨日の死刑判決一特赦決定に他ならない。

こうした状況を作り出す中、敵は既に新たな策動を開始している。凍結解除された190億ドルの借款は、韓国経済の崩壊を何とかくい止めつつ「援助」という名の経済侵略を拡大していくほかの何ものでもない。更に全斗煥は日米韓の軍事的、政治的、経済的同盟関係の強化と財閥資本支配の援助を求めて、来月2、3日に訪米し、その途中に来日することを検討している。一層のテコ入れ強化を結果するこの全斗煥来日は決して許されてはならない。全学の諸君！　金大中氏ら政治犯の完全釈放を勝ち取り、全斗煥来日を阻止せよ！　闘いを、あらゆる人民に訴えよ、外務省前集団抗議に決起せよ！

同学会